

## 第50回夏季県外史跡踏査新潟県（新潟港、新発田、新津）方面

### —古代から現代までの新潟港と石油採掘、駐屯地・新発田を訪ねる—

川崎市立川崎総合科学高等学校 阿部 功嗣

#### はじめに

今回は東日本大震災の影響により当初の計画を大幅に変更し実施した。被災地支援中にもかかわらずご協力を頂いた関係諸機関の皆様に深く感謝し厚く御礼申し上げます。

#### 1 新潟港

最初の目的地は新潟県政記念館(国重文)。明治16(1883)年に建てられた現存する最古の県会議事堂遺構である。合流した伊東祐之先生(新潟市歴史博物館副館長)曰く「復元された北前船みちのく丸が寄港し、昨日はかなり賑わいました。」(残念ながら信濃川河口沖合8kmで展帆航行実験中)。新潟港の成り立ちは近世に白山神社の河岸を起点とし、堀割による碁盤目状の町域が形成されたとのこと。歴史博物館に到着し明治2(1869)年築の擬洋風建築、旧新潟税関庁舎(国重文)へ向う。昭和40年までここで税関業務が行われた。新潟港は安政5(1858)年の修好通商条約で開港五港の一つに指定されたが、実際に開港したのは明治元(1868)年。本州日本海側唯一の開港地として期待されながら開港が遅れた理由の一つに信濃川の土砂堆積作用による水深の浅さがあった。本館常設展示テーマは越後平野と「水」とされている。伊東先生は「頻繁な洪水と湿地帯が一面に広がるこの環境との闘いを抜きにして、越後の歴史を考えることはできない。」と強調した。

博物館を後にして柳都大橋を渡る。右手に昭和4年竣工の3代目萬代橋、左手の新潟西港には、万景峰号が発着した中央埠頭が見える。信濃川右岸の新発田藩領沼垂は中世から戦国期のこの地域の中心で、近世に入り対岸新潟の隆盛に圧されたが、鉄道網が整備されると新潟駅を中心として新潟町と沼垂町の一体化が実現した。

沼垂から北上し、明治期からの工場地帯を抜け昭和シェル石油新潟輸入基地(58万m<sup>2</sup>)に到着。当地は昭和9年に石油新潟製油所が建設、昭和17年に昭和石油となって本格的稼働となったが、昭和39年新潟地震で日本初の大規模コンビナート火災が発生、昭和60年製油所としての機能を停止、石油製品輸入基地となった。担当者曰く「この地域で産する石油は枯渇状態にあり、日本海側での輸入石油産業も急激な伸張は臨めない。そこで自然エネルギー発電事業(ソーラーフロンティア)が注目され、昨年8月に雪国型メガソーラー発電所建設が実現した。」。屋上に上がると、年間発電力1ギガワットのパネル群が立ち並ぶ様子を一望にできた。パネル群の南東側には砂丘が横たわり、大化3(647)年に設置された淳足柵跡と推定される物見山が臨めた。

#### 2 阿賀野川

享保16(1731)年に阿賀野川河口となった松ヶ崎浜を通り、福島潟湖畔の環境と人間のふれあい館に到着。映像鑑賞後、塚田真弘館長から1階阿賀野川水系ジオラマ上で、昭和電工鹿瀬工場周辺の地形や、流域の水銀中毒発症の様子について説明を受けた。昭和3年に鹿瀬ダム・鹿瀬発電所が竣工し、翌年その電力を使用する昭和肥料が工場設立、昭和11年に水銀を触媒としたアセトアルデヒド製造を開始した。その後昭和30年代後半に生産量が急増し、昭和40年の公式発表以来、692名(2007年現在)が認定を受ける新潟水俣病の

被害へと繋がった。そもそも近代の阿賀野川上流域において鉱山開発を開始したのが足尾銅山で有名な古河市兵衛であり、鹿瀬はその鉱山労働者の集落であったという。

### 3 新発田

二日目は会津街道の要地五十公野から始まった。新潟から移築された旧県知事公舎を見学し、田中耕作先生（新発田市教育委員会教育部生涯学習課文化行政室室長）と合流。五十公野御茶屋（国名勝）は明暦3（1655）年に三代藩主宣直が建て、参勤交代の際の拠点や藩主の茶会に用いられた。会津街道を西へ向かい新発田市清水園へ。もとは藩主下屋敷で、明治初期に沢海の豪農伊藤家が買い取り料亭に利用した。寛文6（1666）年築の数寄屋建築書院と続く庭園は国指定名勝で、酒蔵を移築した資料館は考古、民俗、新発田藩関係資料が充実している。足軽長屋（国重文）は天保13（1842）年築で、実際には足軽より下の御門番組役人らの住居。一棟八戸の茅葺き平屋建ての長屋で坪六畳間二部屋である。当時の下級役人の生活を垣間見た。

新発田城は慶長3（1598）年に加賀大聖寺から六万石で入封した溝口秀勝が、新発田氏の城跡に築城し、宣直の時（1654）に完成。明治初期にはほぼ破棄されたが、享保17（1732）年築の本丸表門、寛文8（1668）年築の旧二の丸隅櫓が残り国重文となっている。表門内部には発掘調査の様子とその成果が解説展示され、全国唯一の三つの鯨を載せた本丸三階櫓は、『所々御普請年暦』に残る寸法と明治5年頃撮影の古写真、そして発掘調査結果を整合させ平成16年に復元された。本丸辰巳櫓も発掘調査が行われ、同時に復元された。二の丸隅櫓は昭和35年に解体調査され、本丸鉄砲櫓跡に移築された。本丸石垣は美観を重視した「切込はぎ」技法で積み上げられ、毎年自衛隊員が訓練の一環として石垣の除草を行っている。

次いで新発田駐屯地二の丸発掘調査現場に向かう。今回の発掘調査は明治7年築の白壁兵舎解体移築、資料館建設に伴うもので、古図面により速水某と堀文之丞屋敷跡と推定されている。プレハブの仮設資料館内では自衛隊新発田連隊広報班から、駐屯地と連隊の歴史を解説して頂いたが、彼らは訪問の直前まで、南相馬市で災害救助活動を行っていた。

### 4 新津

阿賀野川を渡り、沢海の国登録有形文化財北方文化博物館豪農の家の見学後、新津の新潟県埋蔵文化財センターへ向かう。当センターの山本肇先生に展示室の解説を受けた。新潟の発掘調査は高速道路と上越新幹線建設をきっかけに進んだ。丘陵地帯や山間部の遺跡が中心だったが、最近の発掘調査では平野部の地中深くから遺跡が多く発見され注目されている。埋文センターを出て国史跡古津八幡山遺跡へ。20年程前の調査で戦国期山城説が覆され、弥生時代の高地性環濠集落や前期古墳（4世紀）が確認された。

ここからバスで金津の石油の里へ。石油の世界館で中島哲宏先生（友の会事務局長）と小野沢正一先生（同副会長）が合流し、新津油田の歴史を学ぶ。明治29年に機械掘が導入されて産出量が急増し、新津丘陵帯において宝田石油、日本石油、中野興業が三大石油会社と呼ばれた。産出量は大正5年がピークで、大正末期から昭和初期には枯渇により産出量が激減した。平成8年には中野家が採掘を止めた。だがその後、産業化遺産指定を受け、史跡、教育活動の場として整備を進めている。石油採掘施設やオイルサンドを見学したのち、バスに乗り込み帰路へ。今回の踏査も無事に終了した。